２０１６．１０．３０　大草

読書メモ

30．石田瑞麿　　「教行信証入門」　講談社

31．奥村宏　　　「トップの暴走はなぜ止められないか」　東洋経済新報社

32．玄侑宗久　　「しあわせる力」　角川マガジンズ

33．佐藤俊明　　「心に残る禅の名話」　大法輪閣

34．司馬遼太郎、ドナルド・キーン対談　「日本人と日本文化」

35．樋口晴彦　　「なぜ企業は不祥事を繰り返すのか」　日刊工業新聞社

36．山折哲雄　　「神と仏」　講談社現代新書

37．司馬遼太郎・山折哲雄対談「日本とは何か」　日本放送協会出版

＜曹洞宗と臨済宗の違い：法事・法要・四十九日がよくわかるＨＰから＞

**禅問答」を行う臨済宗**

禅宗といえば、すぐに「座禅」を思い浮かべるほど、日本で定着しています。  
禅宗には大きく臨済宗と曹洞宗の二大宗派があり、共通している部分と異なる部分があります。共通の部分は座禅で悟りを開くことと、師から弟子へと教えが伝わることを重要視している点です。  
異なる点は法灯（師匠から弟子への系譜）と「座禅」の仕方などが違います。禅を行うとき、臨済宗は通路に向かって座り、「看話(かんな)禅(ぜん)」といって、師匠によって与えられた問題「公案」に弟子は身体全体で取り組み、悟りを開くというものです。  
「公案」とは「禅問答」のことで、いまではむずかしい問答、訳のわからない問答といった意味に使われていますが、悟りにいたる重要な課題として「公案」を使っています。  
禅宗はインドの達磨によって５２０年、中国に伝えられました。ダルマは開運の縁起物として知られていますが、それは達磨が中国河南省少林寺で面壁９年の修行を行ったところからきています。壁に向かって９年間座禅を組んだため、足が腐って無くなってしまったため、ダルマには足がないのです。  
達磨から１１代目の臨済義玄が臨済宗を開きました。宋に留学した栄西禅師が１２０４年、京都に建仁寺を建立してから、日本に臨済宗が伝わります。しかし、京都は天台宗が力を持っていたので、なかなか広まりませんでした。  
禅宗を広めたのは、中国から来た僧が１２４８年、鎌倉幕府の執権、北条時頼の全面的な支援を受けてからです。鎌倉に建長寺を建てて、禅堂での日常規範を定め、禅寺の基盤をつくりました。  
１２７９年、北条時宗に招かれてきた中国の僧は、蒙古との戦いで命を落とした武士の追善供養のために円覚寺を建てました。次々と禅宗のお寺が建てられた当時の北鎌倉はまるで中国街のようだったそうです。建長寺と円覚寺は現在にいたるまで、禅の道場として有名です。  
臨済宗は師から弟子へと伝えていくことを重んじますので、それぞれの寺院が独自の流派をもっています。妙心寺（京都市）、建長寺（鎌倉市）、円覚寺（鎌倉市）、南禅寺（京都市）などが臨済宗として有名な寺院です。  
本尊は釈迦如来です。  
特定の経典は定めていませんが、教化には金剛般若経、観音経、般若心経、大悲呪、座禅和讃などを用いています。  
「南無釈迦牟尼仏(なむしゃかむにぶつ)」と唱えます。

**ひたすら座禅することを説く曹洞宗**

臨済宗と曹洞宗の一番の違いは座禅の仕方です。曹洞宗では壁に向かって座って、座禅をします。「黙照禅(もくしょうぜん)」といって、ただひたすら座禅に徹する、つまり「只管打坐(しかんたざ)」することをそのまま悟りとする教えです。  
この教えを広めたのが高祖・承陽大師道元です。８歳で出家後、１２歳で比叡山に入り、天台座主、公円のもとで出家します。その後、禅宗の建仁寺で、栄西の高弟、明全に師事し、２３歳のとき、明全とともに宋に留学するのです。  
中国で臨済宗が上流社会と交流するのに疑問を感じた道元は、ただひたすら座禅に徹する曹洞禅を学んで５年後に、明全の遺骨とともに帰国します。  
俗塵を嫌った道元は、雪深い福井に永平寺を建てます。一時、北条時頼の招きで鎌倉に移りますが、すぐに永平寺に戻って隠棲し、出家至上主義をつらぬいて、５４歳の生涯を閉じました。  
道元から４代目にあたる太祖・常済大師瑩山(けいざん)がその後、大衆教化につとめ、現在、日本最大の寺院数を誇る巨大教団となっています。  
曹洞宗では道元を宗派の父、瑩山を母にたとえ、両祖を宗祖と仰いでいます。本山は永平寺（１２４４年創建）と総持寺（横浜市）です。  
本尊は釈迦如来です(臨済宗も同じ)。  
経典として用いるのは、法華経、金剛経、般若心経などと、道元が著した正法眼蔵です。  
「南無釈迦牟尼仏(なむしゃかむにぶつ)」と唱えます（臨済宗も同じ）。

＜「日本人と日本文化」より＞

キーン：徳川時代に儒教が日本人のなかに案外ひろまって、現在でも相当根強いのでは。

　　　　日本の道徳は儒教的な道徳でしょう。現在先進国で犯罪率が毎年増えてないのは日本だけ。これは儒教の影響ではないか。

司馬　：僕はその意見にわりあい反対。日本は、江戸時代に各藩に儒学者が少数いるだけの儒教に留まっている。室町時代に、小笠原家が作った礼儀作法などのでがんじがらめにされただけで、儒教とは関係がない。一般人は、儒教の影響をほとんど受けてない。恥とかカッコ悪いとかの美意識が犯罪を抑制しており、犯罪率が増えない理由である。儒教とは関係ない。

キーン：日本人はどんな凶悪犯でも儒教的な言葉で謝罪する。社会又は世間に対する罪悪感がある。外国の場合は、犯行を否定し、謝罪はしない。世間の哲学は、儒学でしょう。儒教を学んでなくても近松の人形浄瑠璃を見て、儒学的なものをなんとなく自分の思想として吸収していたのではないか。

司馬　：分かりました。世間の基準みたいなのがあって、それに対して恥ずかしいと思うのだが、その基準が儒学的なものだと。

キーン：義理人情という言葉は、仏教でも神道でもなく、儒学的言葉である。近松の悲劇が義理人情ものであれば、その芝居を見た人は倫理的な思想を吸収したのではないか。

司馬　：儒教はあまり普及しておらず、日本人に対して影響しなかったのではないか。

キーン：儒教の影響は強かったし、現在も儒教の影響は相当強いと思う。

（二人の意見が違うが、私はキーンの意見に賛成である。）

キーン氏は、江戸時代に徳川体制を守るために儒教（仁義礼智信など）を取り入れ、その儒教的な思想が当時の日本人に相当広まっていたと見ている。

⇒　①仏教と儒教は日本人の精神の中に生きている。

②江戸時代の儒教思想が一般的な日本人の精神に根付いており、コンプライアンスの意　　識に通じるものがあるのではないか。

＜神道におけるあの世とは＞

神道における人間の死後の世界観は、諸説あるが、次のように神になるとする説が有力と思われる。

・者は、霊魂に戻り、神となって自分の子孫を見守る。

・日の本に生まれ出でしに益人は、神より出でて神になるなり』（中西直方：江戸時代の伊勢神宮の神職）

・霊魂（精霊）が、生まれた赤子の体内に入って人間になる。肉体が滅んでも、霊魂は肉体を出て永遠に生きる。

・先祖の霊魂は、人々の住む「村」の近くや原野にいて子孫を見守る。そして先祖の霊魂は景色のよい山を好むとされるために、「村」を見下す形のよい山が神様の住む山とされた。

・人は死ぬと霊魂が肉体を抜け神となり、常世国や高天原や人々の住む村落や海岸にいる。

⇒黄泉の国に行く霊魂と高天原に行く霊魂との差は、どこでどのようにして生じるのか？

（私の疑問）

＜奥村宏「トップの暴走はなぜ止められないのか」より＞

・結論：トップの暴走を止めようとすると、その組織から自分が排除されてしまうので、これを恐れて、トップの暴走を知っても何も言わない、何もしないのである。

・会社制度の中では、トップは何でもできる上、会社は有限責任であり社会への無責任体制を保証しており、トップは暴走できる環境下にあると言える。

・奥村説：日本の株式会社の問題点

①大企業間での株式相互持合い（安定株主で相互に干渉しない関係を維持できる制度）

②株主主権の衰退（株主が自然人のほか法人にまで拡大されたことによる）

③経営者を厳罰に処する法律はあるが、株式会社そのもののあり方は問題にされない。

⇒不祥事を産み出す仕組みとなっている。

④株式会社の巨大化とその寿命が尽きていること。

⇒巨大化した株式会社は解体しなければよくならない。

＜島園進「日本仏教の社会倫理」から＞

島園進氏は、近代仏教学が仏教の倫理性を軽んじてきたがこれを改めるべきと主張する。

・A説：仏教からは、世俗社会と積極的に関わるような倫理性は出てこないとする。

・B説：大乗仏教で顕著な慈悲の理念を仏教の倫理性の基盤としようとする。（ただし、これを筋道立てて論ずる仏教学者は少ない。）

・島園氏主張：仏教の正法の理念を基軸におき、倫理性、社会性が大きな位置をもつものとする日本仏教理解を提示する。即ち、仏教には、本来、社会倫理的な実践が大きな要素として備わっていた。また、仏教学専門家の仏教理解と一般市民の仏教的思考や実践が大きく乖離してしまっている。

⇒仏教は、現代のコンプライアンスにも影響を与えていると考えられる。

以上